

## ラシードウッディーン『中国史』近刊刊本二種

矢島 洋一\*

### I. はじめに

14世紀初頭、イルハン朝下のイランにおいて、ガザン(Ġazan, 在位1295-1304年)、オルジェイトウ(Ölgaitū, 在位1304-16年)両君主の命令により宰相ラシードウッディーン(Rašīd al-dīn Faḍl Allāh Hamadānī, 1318年没)が編纂したペルシア語史書『諸史の集成(Ġāmi' al-tawārīḥ)』(以下、日本での慣例に従い『集史』と呼ぶ)は、13-14世紀のユーラシア史を再構成するための最重要史料の一つである。『集史』は、第1部モンゴル史、第2部世界諸民族史、第3部地誌の3部で構成され、うち第2部に含まれる、中国の歴史を扱った「ヒタイの帝王たちの諸民族史(tārīḥ-i aqwām-i pādīshāhān-i Ḥitāy)」(以下『中国史』)は、特に東西文化交流史上興味深い文献として知られている。その序文によれば、『中国史』はガザンに召し出された2人の中国人学者の協力のもと、彼らが携えてきた漢語史書を参考に書かれたという<sup>1)</sup>。その漢語史書は未だ特定されていないが、3人の「和尚」の手になるものであったというから、おそらく仏教文献であったと思われる。『中国史』は、地域・民族・宗教を超えた協力関係の上に成立したものであったのである。

『集史』は、現存しない第3部を除けばそのすべてを何らかの刊本で見ることができるが、全体を含む刊本は未だに現われておらず、既存の部分的な刊本もしばしば不完全である。うち『中国史』については、既に1971年にヤーン(Karl Jahn)氏がフランケ(Herbert Franke)氏の協力のもと写本の写真版とドイツ語訳を合わせて刊行しているが[Jahn 1971]<sup>2)</sup>、校訂本は長らく存在しなかった。かつて日本の本田實信氏も校訂本と日本語訳の発表を予告したが[本田 1988: 5]、それを果たすことなく他界された。ところが近年になって、以下の2つの『中国史』校訂本が相次いで刊行された。

*Tārīḥ-i Āl az Ġāmi' al-tawārīḥ-i Ḥwāḡa Rašīd al-dīn Faḍl Allāh*, ed. Wāng Ī-Dān (王一丹), Tih-rān: Markaz-i Našr-i Dānišgāhī, 1379/2000, x+283 p. (以下略号 W)

Rašīd al-dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Ġāmi' al-tawārīḥ (tārīḥ-i aqwām-i pādīshāhān-i Ḥitāy)*, ed. Muḥammad Rawšān, Tih-rān: Mīrāt-i Maktūb, 1385/2006, xix+180 p. (以下略号 R)

本稿では、これら2つの『中国史』刊本を紹介したい。

### II. 王一丹校訂本

2000年、中国の王一丹氏がイランの出版社から『中国史』の校訂本を出版した。この刊本は、『中国史』本文テキストの他にも、ラシードウッディーンとその著作活動等に関する長い序文、諸写本のサンプル図版(一部カラー)、詳細な語注、文献目録、索引、略号一覧を含み、研究書としての性格をもつ充実した刊本である。本文テキストの校訂に使用された写本は以下の通りである。

---

\* 京都外国語大学非常勤講師

1) この序文には日本語訳がある[本田 1988: 5-12]。

2) ヤーン氏は『集史』世界諸民族史編のうち他にも「オグズ史」「ユダヤ史」「フランク史」「インド史」を刊行している[Jahn 1969; 1973; 1977; 1980]。

1. グレストーン宮殿図書館 (Kitābhāna-yi Kāh-i Gulistān) No. 39 写本
2. イギリス図書館 (British Library) Add. 7628 写本

うち前者を底本とし、同時に以下の写本・刊本をも参考にしている。

1. トプカプ宮殿博物館図書館 (Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi) Hazine No. 1653 写本<sup>3)</sup>
2. ナーセル・ハリリー・コレクション (Mağmū'a-yi Nāşir Ḥalīlī) No. 727 写本 (アラビア語訳)<sup>4)</sup>
3. 『バナーカティー史 (Tārīḥ-i Banākātī)』モザッファル・バフティヤール図書館 (Kitābhāna-yi Muẓaffar Baḥtiyār) 写本ならびにジャアファル・シェアール校訂本 [Ši'ār 1969]

さて、『中国史』には、中国歴代王朝の君主名を中心に、アラビア文字音写された数多くの漢語が含まれている。そして『中国史』校訂上の最大の問題は、それらの漢語の処理である。『中国史』に含まれる漢語の原語を特定すること自体は、中国史の知識があれば多くの場合さほど困難ではなく、既にその同定作業はヤーン、フランケ両氏によってなされ、ウェイド式ローマ字転写によってドイツ語訳に組み込まれている。しかし、ペルシア語テキストとして写本の写真版を掲載しただけのヤーン本と異なり、校訂本を作成するにはそれらのアラビア文字音写漢語の綴形を確定しなければならず、その作業は以下の二つの理由から極めて難しい。

第一に、現存写本における綴形は崩れているものが多く、写本間の異同も大きいことである。また写本ではアラビア文字の判別点は付されないことも多く、付されている場合も相当に混乱している。例えば写本上における B (・P)・T・I (語頭と語中においては N・Y も)、Ġ (・Ġ)・Ḥ・Ḥ、S・Š、R・Z (・Ž) は読み替え可能と考えなければならない。また、明らかに R・Z・W と語末の N を混同した箇所も多いので、それらも読み替え可能とみなすべきである。結果として、どの写本を底本にするにしろ、写本通りの綴形はそのままでは校訂テキストに採用できない場合が多い。

第二に、それらの音写は一貫した体系的な転写システムに基づいていないことである。例えば漢字音の韻尾 [-ŋ] は基本的には -NK と綴られるが、単に -N とのみ書かれる場合も多い。また、母音の表記には A・Y・W が用いられるのが原則であるが、省略されることも多い。従って、原語の漢語の推定再構音から導かれた理想的な音写形をそのまま校訂テキストに採用することもできない。第一、『中国史』のインフォーマントの漢語自体、当時の漢語の一般的な再構音 (所謂近世音) の体系とは異なる方言の要素を含んでいた可能性もあるのである。

結局のところ校訂テキストには、写本における崩れた綴形と、原語から導かれた理想的なアラビア文字音写形の間で、最も蓋然性の高い綴形を採用するという方式をとらざるを得ない。結果として、文献学的にはやや危険ながら、ある程度大胆な emendation を施さざるを得ない場合が多い。

王氏は漢語音写の再構手続きについて、中国史料と「古中国語」を参考にしていること以外に明確な方針を示していないが [W: 55]、概ね上記のような方法をとっていると思われる。その再構形は概して妥当であるが、不適切と思える箇所も少なくない。

例えば、「陳留王」<sup>5)</sup> は写本の綴形 HBWLYWAN ~ ĠYWLYWAN<sup>6)</sup> から ĆN LYWAN と再構さ

3) この写本は、上述ヤーン本に写真版が掲載されている。

4) この写本もヤーン本に写真版が掲載されており、後に鮮明なカラー写真を含む研究書も出版されている [Blair 1995]。

5) 魏の元帝奥 (在位 260-65 年)。

6) 以下、写本の綴形は王刊本の脚注に記されたヴァリエントによる。王刊本のヴァリエントでは、写本において

れているが [W: 90.10]<sup>7)</sup>、「陳留王」の再構音 [tʃʰin liw wɑŋ]<sup>8)</sup>、B/Y を同一視可能なこと、W と語末の N が混同されやすいことを考慮すれば、「陳」の母音表記 Y を省かず ČYN LYWAN と再構すべきだろう<sup>9)</sup>。このような一見微細な点を指摘するのは、『中国史』が歴史資料としてばかりでなく言語資料としての価値をも有しているからである。『中国史』に含まれる多くの漢語音写は、同じくラシードウッドディーンによって中国医学書を典拠に著されたペルシア語医学書『珍奇の書 (Tangšūq-nāma)』に含まれる漢語音写<sup>10)</sup>と共に、14 世紀の中国語音韻史にとって重要な対音資料なのである。ただし、アラビア文字にない特殊な文字まで創出して可能な限り漢語音を正確に写すことに執着した『珍奇の書』と比べて、『中国史』の漢語音写は前述の通りかなり不安定である。そして、『中国史』中の漢語音写の綴形の再構においては、写本の綴形の他に原語の漢語音をも根拠にせざるを得ないことを考えれば、そのようにして再構された綴形を中国語音韻史の資料として用いることは循環論法に陥る危険をはらむことになる。しかし、写本の綴形から確実に再構できる音写形は十分言語資料として用いることが可能であり、そのためには可能な限り原綴を追求すべきだろう。この場合の Y の有無は、韻母の主母音がアラビア文字で表記されるか否かということを示しており、それは言語資料としては重要な点なのである。

また、「烈王」<sup>11)</sup>の諸写本における綴形は BBLH WANK であるが、LYH WANG と再構されている [W: 112.6]。これは「烈王」の再構音 [lje wɑŋ] から導いたものと思われるが、写本の綴形からはかけ離れすぎているように思える。これはむしろ烈王の異名「夷烈王 [ji lje wɑŋ]」を写したものと見做し、YYLH WANG とでも再構すべきだろう。同様に「顛王 [xjen wɑŋ]」<sup>12)</sup>は写本の綴形 HWYN SYNK WANK ~ HYN SYNK WANK の2音節目が全く無視され HYN WANG と再構されているが [W: 112.7]、これも顛王の異名「顛声王 [xjen ʃiŋ wɑŋ]」から問題なく HYN ŠYNG WANG と再構できる。これらの人名表記は『中国史』の典拠を考える際の手掛かりになるはずであるが、過剰な emendation によってそのような重要な情報がテキストから抜け落ちてしまっていることになる。

漢語音写の再構作業は当然ながら現代中国語音ではなく当時の漢語音である近世音に基づくべきであり、王刊本においても勿論その点は考慮されているが、時に現代音に引きずられたと思われる再構形もある。例えば、「二世胡亥」<sup>13)</sup>は写本の綴形 ŽŠY HŴĜWY ~ ŽŠY HŴĜWY ~ ŽŠY ĞŴĜW から ARŠY HŴĜWY に直されている [W: 122.3]。「二」を AR とするのは現代標準中国語音 ər [aɪ] に従ったものと思われるが、「二」は近世音 [ʒl] 以降、まず韻母が消失し、代わりに声母の前に母音が生じて [aɪ] に至ったと考えられており [佐藤 2002: 38]、14 世紀の段階ではまだ語頭の母音は生じていなかったと思われるので、写本にも語頭にアリフをもつヴァリエントがな

判別点が付されていないものについても何らかの判別点が与えられているが、前述の通り判別点の如何は基本的に無視すべきなので、さしあたり大きな問題はないと考える。

- 7) 以下、ページ数の点以下は行数を表すものとする。
- 8) 以下、漢語の再構音は基本的に [Pulleyblank 1991] に依拠するが、[李・周 1999; 佐藤 2002] 等により一部改めた箇所もある。
- 9) 王刊本では、写本にない B/P・Ĝ/Č・Z/Ž・K/G の区別も再現されている。また原則として漢語破裂音の有気音・無気音の対立はアラビア文字の無声音・有声音の対立に置き換えられており、これは妥当な処理であると思われる。ただしモンゴル語語源の語彙については一部無声音・有声音の区別が不徹底な箇所がある。例えば、[W: 83.10] におけるモンケ MWNKKA、フレグ HWLAKW はそれぞれ MWNGKA、HWLAGW とすべきである。
- 10) 『珍奇の書』における漢語音写については、[遠藤 1997] を参照。
- 11) 東周の烈王 (在位前 375-69 年)。
- 12) 東周の顛王 (在位前 368-21 年)。
- 13) 秦始皇帝の末子で、第二代皇帝 (在位前 210-07 年)。

い以上、ここは写本通りに単に  $\dot{Z}$  とすべきだろう<sup>14)</sup>。

このように王刊本における漢語音写形には問題もあるが、テキストの脚注には写本のヴァリエーションが記されているので、読者はその妥当性を検討しながら読み進めることができる。また原語が判明しているすべての漢語音写には、脚注において対応する漢字（簡体字）と拼音（声調記号は省かれている）が記されている。漢字表記が付されていることは本書の最大の長所と見做すべきで、漢字に慣れた読者にとってはヤーン本のドイツ語訳におけるウェイド式ローマ字転写よりはるかに使いやすいであろう。

なお、王氏はその後『中国史』の中国語訳を含む研究書を出版しており [王 2006]、その中には刊本における漢語の解釈を改めた箇所がある。例えば、「合雑紀」<sup>15)</sup> は写本の綴形  $\text{HH H\ddot{U}WN KY} \sim \text{HH ZKY} \sim \text{HH H\ddot{U}WRKY}$  から刊本では  $\text{HH LW\ddot{U}GY}$  と再構されている [W: 94.9]。「雑 [law]」は LAW あるいは LW が理想的な音写形であり、校訂テキストの綴形もそれに従ったものと思われるが、それが中国語訳では「合熊紀」に改められている [王 2006: 130]。「合雑紀」を「合熊紀」に作る例は、『中国史』との関係が指摘されている念常『仏祖歴代通載』等の仏教文献に見え<sup>16)</sup>、「熊」の再構音 [xjuŋ] も写本の綴形  $\text{H\ddot{U}WN}$  に近いから、これは妥当な変更といえるだろう<sup>17)</sup>。このように、王刊本を利用する際にはその中国語訳をも同時に参照する必要がある。

### III. モハンマド・ロウシャーン校訂本

王刊本の出版から数年後の2006年、イランでモハンマド・ロウシャーン (Muhammad Rawšan) 氏校訂によりもう一つの『中国史』刊本が出版された。ロウシャーン氏は既に1994年にモスタファー・ムーサヴィー (Mustafā Mūsawī) 氏と共に『集史』第一部モンゴル史の校訂本を出版しており [Rawšan & Mūsawī 1994]、校訂には少なからず問題もあるものの、もはや稀覯書の類に属するアリーザーデ校訂本 [Али-Задэ 1957; 1968; 1980] や欠陥の多いカリミー校訂本 [Karīmī 1959] に替わる標準的なテキストとして普及している。また最近ロウシャーン氏は『集史』第2部の校訂本をも次々と出版しており [Rawšan 2005a; 2005b; 2005c; 2007a; 2007b; 2007c] (一部評者未見)、『中国史』はそれら一連の『集史』出版計画の一部をなすものである。

この『中国史』ロウシャーン刊本は、解説や語注が豊富で研究書としての性格をもつ王刊本と異なり、簡単な序文、校訂テキスト、写本間の異同、索引からなるシンプルな体裁である。本文テキストの校訂に用いられた写本・刊本は以下の通りである。

1. トブカプ宮殿博物館図書館 Hazine No. 1653 写本
2. トブカプ宮殿博物館図書館 III. Ahmed No. 2935 写本
3. スュレイマニエ図書館 (Süleymaniye Kütüphanesi) Damad İbrahim Paşa No. 919 写本
4. 王一丹刊本

14) なお14世紀における日母の音価については諸説あり [李 2002: 102-03]、アラビア文字に音写する場合には  $\dot{Z}$ ・Z・R が考えられるが、それらの文字は判別点のみによって区別されるため、『中国史』写本から推定するのは難しい。王刊本では  $\dot{Z}$  が採用されている。

15) 中国神話時代のうちの一時代。

16) 『中国史』と『仏祖歴代通載』に共通点が多いことは既に [Franke 1951] において指摘されており、[W: 45; 王 2006: 89] でも言及されている。しかし両氏も述べるように、至正元年 (1341年) 成立の『仏祖歴代通載』は『中国史』の直接の典拠ではあり得ない。

17) 従って、テキストも  $\text{HH H\ddot{U}WN GY}$  などとすべきである。

うち底本にしているのは1の写本である。また、校訂にあたって王刊本を参照していることが注目される。ロウシャン氏による王刊本の評価については、序文において述べられたロウシャン氏自身の言葉を読むのが早道であろう。以下、一部意識を交えつつ訳出する。

私は『インド史』の校訂作業を終えた後、イタリアで『中国史』の校訂を行った。私が底本としたのはトプカプ宮殿博物館 Hazine No. 1653 写本で、スュレイマニエ図書館の Damad İbrahim Paşa 写本とも対校した。後者の写真はテヘラン大学中央図書館に No. 52-3048 として収められており、書写年はヒジュラ暦 885 年である。

イランに帰ると、王一丹女史が校訂・研究した『集史』「中国史」の刊本が出ていることを知った。私は、このあらゆる意味で難しいテキストの校訂は喜ばしく価値あるものだと思う。序文の書き方も堅実で好ましく、賞賛に値する。しかし私の考えでは、ゴレスターン宮殿写本を底本にしたのは適切ではなかった。私の意見では、トプカプ No. 1653 写本の方が、書写年が 200 年余り早いこと、『集史』原本から直接書写していることなど、いくつかの点で他の写本よりも勝っているといえる。

私は 1381 年メフル月（2002 年）に『集史』のイギリス図書館 Add. 7628 写本を見ているが、その写本からは文字通り一つの名前すら正しい語形を再構できないので、依拠できない乱雑な写本であると考えられる。

王一丹刊本の p.148 と p.154 の 2 ページではそれぞれ最後の 1 行が脱落しているが、それは氏の業績の価値を減ずるものではないといえる。氏の校訂の一部について「写本間の異同」で意見を述べておいたが、それもまた「弘法も筆の誤り」の類だと思う。

私には『中国史』を出版する意思はなかったが、『集史』「世界史編」出版の責任と、友人たちの求めにより、やむなくこの仕事にとりかかった。比較的良好な「世界史編」の写本や、スュレイマニエ図書館写本を得たこともその動機である。[R: xiii-xiv]

このように、ロウシャン氏は王氏の仕事を評価しながらも、底本の選択については批判しており、評者もその批判は妥当なものとする。また、ロウシャン氏は写本間の異同を記した注記<sup>18)</sup>において、王刊本のテキストを検討し批判を加えている。実際、両刊本の本文テキストの間には、前置詞 *ba* を分かち書きするか否かといった綴り上の違いを除いても、100 箇所を超える相違点がある。一つの例を挙げて検討してみよう。以下は、『中国史』序文において、中国の書物が綿密な校閲を経ていることについて述べた部分である。太字は両刊本の相違点である。

[W: 90.6-8] pas ma'lūm šud ki kutub-i ahl-i ĥitāy az šawā'ib-i tağyīr wa tabdīl **mu'arrā** wa mubarrā mī-bāšād wa az maḥāyil-i tašhīf wa **taškīk** muğarrad.

「かくして、ヒタイ人の書物には改変・変更という汚点を免れており、誤記・疑念という徴が無いことが分かった。」

[R: 11.7-8] pas ma'lūm šud [ki]<sup>19)</sup> kutub-i ahl-i ĥitāy az šawā'ib-i tağyīr wa tabdīl [**mubarrā**] wa mubarrā mī-bāšād, wa az maḥāyil-i tašhīf wa **taškīl** muğarrad.

「かくして、ヒタイ人の書物には改変・変更という汚点を免れており、誤記・形成という徴が無

18) なお、序文においては底本である Hazine No. 1653 写本の略号は「TW」であるとしているが、なぜか注記では「A」の略号が使われている。

19) ロウシャン刊本の本文テキストにおける [ ] は、底本にない語を別写本から補ったことを表す。

いことが分かった。」

共に大意は同じであるが、2箇所において語の選択に違いがある。mu‘arrā と mubarrā と muğarrad はこの場合ほぼ同義で「～が無い、～を免れている」を意味するが、最初の相違点のうち ロウシャン刊本で mubarrā が繰り返されているのは明らかに不自然であり、[mubarrā wa] mu‘arrā の誤記あるいは誤植と思われる。もう一つの相違点について、王刊本の脚注では底本に taškīl とあることが明記されているが、本文テキストに taškīk を採用した根拠は示されていない。ロウシャン氏も注記において、ここを taškīk とする写本は存在するものの、王刊本であえて底本にある taškīl でなく taškīk を採用する理由を不明とし批判している [R: 79]。taṣḥīf 「誤記」<sup>20)</sup> と並列される語としては、taškīl 「形成 (すること)」<sup>21)</sup> よりも taškīk 「疑念 (を引き起こすこと)」の方が確かにいくらか文脈には合うが、押韻のため (この場合は II 形動名詞を用いるため) 意味的には多少不自然な語が並列されることは珍しくないので、両刊本の底本を含め主要写本に taškīl とある以上、ここはロウシャン刊本のごとく taškīl を採用し、やや強引ながら「変形」などと解釈するのが妥当であると評者は考える。ところが一方で、ロウシャン刊本が底本にしているはずの Hazine No. 1653 写本の該当箇所は、以下のようにいくつかの点でロウシャン刊本と異なっている。太字がロウシャン刊本との相違点である。

pas ma‘lūm šud kutub-i ahl-i ḥitāy az šawāyib-i taḡyīr wa tabdīl **mu‘arrā** mī-bāšad wa az **ḥaḡāyil**-i taṣḥīf wa taškīl **mubarrā**<sup>22)</sup>

「かくして、ヒタイ人の書物には改変・変更という汚点が無く、誤記・変形という恥辱を免れていることが分かった」

写本の mu‘arrā を刊本で [mubarrā] wa mubarrā としているのは上述の通り誤記あるいは誤植と思われるが、写本の mubarrā を刊本で muğarrad とする理由は注記にも言及されておらず不明である。ここを写本通りに ... mu‘arrā ... mubarrā とすることには何の問題もなく、むしろ押韻の上からはその方が適切である。また写本の ḥaḡāyil 「恥辱」の方が刊本の maḡāyil 「徴、想像」より意味的にも押韻的にも間違いなく適切であるが、後者を採用していることについて一切説明がない。おそらく、ロウシャン刊本は同写本を底本としながらも、校訂作業においては必ずしも直接写本からテキストを構築しておらず、王刊本のテキストに引きずられているものと思われる<sup>23)</sup>。このようにロウシャン刊本の校訂作業は時に杜撰であると言わざるを得ない<sup>24)</sup>。

以上のようにロウシャン刊本の本文テキストは必ずしも信頼のおけるものではないが、王刊本のテキストに対して妥当な批判を加えている箇所も多く、概してペルシア語テキストについては王刊

20) taṣḥīf は厳密には「アラビア文字の判別点を間違えて付すこと」を意味するが、ここでは中国の書物について述べているので、単なる「誤記」を表すと思われる。

21) ロウシャン氏は taškīl を「発音符号を付すこと (i‘rāb guḡari)」と解釈しているが [R: 79]、その語義は文脈に合わない。

22) Fol. 393v の 3-4 行目にあたる。そのページはヤーン本に図版 5 として掲載されている。なお写本では一部判別点が省かれているが、ここで示した読み以外の可能性はないと言ってよい。

23) なおこの箇所の解釈については、同写本から直接翻訳したヤーン氏のドイツ語訳と本田氏の日本語訳をも参考にした。以下に引用しておく。“Hieraus dürfte zur Genüge deutlich geworden sein, daß die Bücher des Volkes von Ḥitāi frei von Veränderungen und Verwechslungen, aber auch von Verschreibungen und Mißverständnissen sind.” [Jahn 1971: 25-26] 「かくしてヒタイ人の書物が改変や混同の不純さを含まず、誤写や変形の恥辱を免れていることは明白となった。」 [本田 1988: 11]。

24) 単純な誤植も散見する。例えば [R: 2.5] の farmūdan は farmūd の誤りである。

本よりもロウシャン刊本の方が勝っている。ただし、ロウシャン氏は明言していないが、漢語音写についてはロウシャン刊本は王刊本に全面的に依存しており、本文テキストに採用されている綴形は、誤植と思われる若干の例<sup>25)</sup>を除けば王刊本と同じである。脚注ではすべての漢語に王刊本と同様声調記号を省いた拼音が付されているが、残念なことに漢字表記は付されていない。

なお巻末には分類索引が付されており有用であるが、テキスト各ページの最終行の語が誤って次ページの語として登録されるなど編集上のミスもあるので、注意が必要である。

#### IV. おわりに

王刊本とロウシャン刊本を比較するならば、前者は漢語音写について、後者はペルシア語テキストについて、それぞれ中国人とイラン人の得意分野を生かした仕事をしているといえる。しかし、後から刊行されたロウシャン刊本は王刊本の漢語音写を取り入れているので、結果としてロウシャン刊本のほうが完成度が高いといえるだろう。ただし、前述の通りロウシャン刊本のペルシア語テキストも全面的には依拠するわけにいかない。またロウシャン刊本の漢語音写はすべて王刊本に無批判に依存しているので、王刊本の誤りもすべて継承している上、ロウシャン刊本と同年に出版された中国語訳における修正点も当然反映されていない。結局のところ、ロウシャン刊本を主としながら（ただし可能な限り写本をも参照し）、漢語音写については王刊本と中国語訳を参照してその妥当性を検証しながら読んでいくのが最も適切な両刊本の利用法だろうか。これはいささか面倒である。

『中国史』は、14世紀初頭にイラン人（ないしペルシア語使用者）と中国人との協力によって成立したものであった。約700年を経た現在、その校訂にあたってイラン人と中国人が別々に作業を進めたことで同一文献に二つの刊本が生まれ、それらを利用する研究者にとってやや不便な状況が生じてしまったのは皮肉である。イスラーム世界と中国は長期にわたって交流を重ね、その交わりの中から数々の興味深い文化遺産が生み出されてきた。それらの研究においてより高度な成果を生み出すには、それぞれの地域を専門とする研究者同士の緊密な協力が必要であると思われる<sup>26)</sup>。

#### 引用文献

遠藤光暁 1997『王叔和『脈訣』ペルシヤ語訳に反映した14世紀初中国音』余靄芹・遠藤光暁（編）

『橋本萬太郎紀念中国語学論集』内山書店, pp. 61-77.

佐藤昭 2002『中国語音音史——中古音から現代音まで』白帝社.

本田實信 1988『ラシード・アッディーンの『中国史』について』『東方学』76, pp. 1-17.

Али-Заде, Абдул-Керим Али-оглы (сост.) 1957. Фазлуллах Рашид-ад-дин, *Джами-ат-таварих*, III, Баку: Издательство Академии Наук Азербайджанской ССР.

——— (сост.) 1968. Фазлаллах Рашид ад-дин, *Джамі ат-таварих*, I-1, Москва: Издательство «Наука».

——— (сост.) 1980. Фазлаллах Рашид ад-дин, *Джамі ат-таварих*, II-1, Москва: Издательство «Наука».

25) [R: 21.19; 28.9; 29.7; 31.12; 32.12; 39.13] の漢語音写における王刊本との相違は、ロウシャン刊本側の誤植である。一方、[R: 27.3] ではロウシャン刊本が王刊本側の誤植を訂正している。

26) 例えば、サファヴィー朝期のイランでフサイン・ワファーイー (Husayn Wafā'ī) によって編纂されたペルシア語辞典『ワファーイー辞典 (*Farhang-i Wafā'ī*)』は中国所在の写本を底本に中国人研究者によって刊本が出版されたが〔騰 1995〕、校訂者はその辞典自体が中国で著されたと誤解している。そのような初歩的な誤りは、イラン研究者の適切な助言があれば容易に避けられたはずである。

- Blair, Sheila S. 1995. *A Compendium of Chronicles: Rashid al-Din's Illustrated History of the World*, London: The Nour Foundation in association with Azimuth Editions and Oxford University Press.
- Franke, Herbert. 1951. "Some Sinological Remarks on Rašīd ad-Dīn's History of China," *Oriens* 4, pp. 21-26.
- Jahn, Karl. 1969. *Die Geschichte der Oğuzen des Rašīd ad-Dīn*, Wien - Köln - Graz: Hermann Böhlau Nachf.
- 1971. *Die Chinageschichte des Rašīd ad-Dīn*, Wien - Köln - Graz: Hermann Böhlau Nachf.
- 1973. *Die Geschichte der Kinder Israels des Rašīd ad-Dīn*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- 1977. *Die Frankengeschichte des Rašīd ad-Dīn*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- 1980. *Die Indiangeschichte des Rašīd ad-Dīn*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Karīmī, Bahman (ed.) 1338/1959. Rašīd al-dīn Faḍl Allāh, *Ġāmi' al-tawārīḥ*, 2 vols., Tihirān: Iqbāl.
- 李立成 2002 『元代漢語音系的比較研究』北京: 外文出版社.
- 李珍華・周長楫 (編) 1999 『漢字古今音表 (修訂本)』北京: 中華書局.
- Pulleyblank, Edwin G. 1991. *Lexicon of Reconstructed Pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*, Vancouver: UBC Press.
- Rawšan, Muḥammad (ed.) 1384/2005a. Rašīd al-dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Ġāmi' al-tawārīḥ (tārīḥ-i Afranğ, pāpān wa qayāšara)*, Tihirān: Mīrāt-i Maktūb.
- (ed.) 1384/2005b. Rašīd al-dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Ġāmi' al-tawārīḥ (tārīḥ -i Hind wa Sind wa Kašmīr)*, Tihirān: Mīrāt-i Maktūb.
- (ed.) 1384/2005c. Rašīd al-dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Ġāmi' al-tawārīḥ (tārīḥ-i Uğūz)*, Tihirān: Mīrāt-i Maktūb.
- (ed.) 1386/2007a. Rašīd al-dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Ġāmi' al-tawārīḥ (tārīḥ-i Samāniyān, Buwayhiyān wa Ġaznawiyān)*, Tihirān: Mīrāt-i Maktūb.
- (ed.) 1386/2007b. Rašīd al-dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Ġāmi' al-tawārīḥ (tārīḥ-i Āl-i Salğūq)*, Tihirān: Mīrāt-i Maktūb.
- (ed.) 1386/2007c. Rašīd al-dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Ġāmi' al-tawārīḥ (tārīḥ-i Banī Isrā'īl)*, Tihirān: Mīrāt-i Maktūb.
- Rawšan, Muḥammad & Mušṭafā Mūsawī (eds.) 1373/1994. Rašīd al-dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Ġāmi' al-tawārīḥ*, 4 vols., Tihirān: Našr-i Alburz.
- Ši'ār, Ġa'far (ed.) 1348/1969. *Tārīḥ-i Banākātī: Rawḍat ulī al-albāb fī ma'rīfat al-tawārīḥ wa-al-ansāb*, Tihirān: Anjuman-i Āṭār-i Millī.
- 騰慧珠 (ed.) 1374/1995. Ḥusayn Wafā'ī, *Farhang-i Fārsī*, Tihirān: Mu'assasa-yi Intišārāt wa Čāp-i Dānišgāh-i Tihirān.
- 王一丹 2006 『波斯拉施特《史集·中国史》研究与文本翻譯』北京: 昆仑出版社.